

100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 10 / (株)住田光学ガラス

強みは自由な発想を生み出す社風 「ナゼ?」を追い続けて、100周年の先へ



すみ た としあき
住田 利明
代表取締役社長

1950年、東京生まれ。1974年青山学院大学経営学部卒業後、住田光学硝子製造所に入社。経理などを担当する。2009年、先代の急逝にともない代表取締役社長就任。

与野駅からほど近い線路沿いに、(株)住田光学ガラスの本社兼工場がある。現在、光ファイバー製造など光学分野で独自のポジションを築く同社は、数多くの特許を持ち、海外からの引き合いも多いグローバルニッチ企業だ。1923年に東京で誕生して以来102年の歩みを、代表取締役社長 住田利明氏に伺った。

古いガラスのリサイクルから始まって 光学ガラスの国産化に成功

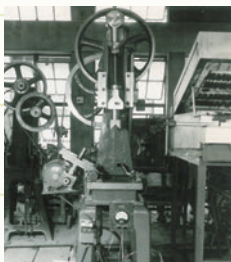
私の祖父で当社の祖である住田利八は、元は彦根で下駄屋をしていました。しかし「人と同じ道をいきたくない」という性格だったようで、30歳を過ぎて都会で一旗揚げようと東京に出てきたところ、駅で気のいい人物に出会い、古いガスメーターのカバーガラスをリサイクルする商売に誘われたのだそうです。

手先が器用だった祖父はその後、ガラスを加工し、医師が額につける反射鏡となる凹面レンズを成形するようになります。



独学の自家製造ですがそれなりに需要はあったようで、このとき東京の巣鴨で住田光学工業(株)という会社を立ち上げています。

後を継いだ父・進は、将来の光学業界の発展を見越し、「光学ガラスの国産化」を志しました。当時光学ガラスはドイツからの輸入が当たり前の時代で、光学ガラスをレンズに加工する住田光学工業でも、母材となるガラスは輸入に頼っている状態でした。レンズをつくるにせよ母材からつくらなければ意味がない、なんとか原料から自社製造できないかと試行錯誤した結果、徐冷によるひずみのないガラス製造に成功し、住田光学硝子製造所(株)を1953年に立ち上げます。



同社の前身時代。自宅兼工場
で光学レンズの国産化に挑戦した。

次々と革新的技術を生み出す 「放し飼いの鶏」たち

当社の代表的な製品である「光ファイバー」や「ホタロン」などは、父の時代に基礎開発がなされています。1985年に大手

電機メーカーと共同開発した非球面ガラスレンズは、従来何枚ものレンズを重ねて調整していたピントを1枚のレンズに集約でき、光学業界における当社の名を一躍高めてくれました。

1989年に三代目社長となった兄・正利は販売面に手腕を発揮し、堅実に事業を発展させていましたが、2009年に急逝してしまいます。そこで急きょ私が4代目となったわけですが、大学は経営学部で理数系の知識などありません。ただ、当社には多くの優秀な研究者・技術者がいます。この人材が力をふるえる会社にすることが私の役割だと考えました。

研究・開発・製造。どの業務でも、自らのミッションに打ち込むためには、安定した待遇が不可欠です。そこで当社では「放し飼いの鶏であれ」というスローガンを掲げました。生活の安心は確保するよ。だから狭い鶏舎には見えないモノを追い求めて、自由に、自在に、しなやかに働こう。その理念を体現する「ナゼ太郎」という鶏がマスコットになっています。

通常、企業では研究職であっても「いつまでになんらかの成果を」と求められるものですが、当社はそういった要求をしません。好きなことを好きなだけどうぞ、という。すると、優秀な人材が自然と集まり、画期的な発明や技術がどんどん生まれる。100年かけて、そういう会社になったのです。

独自性の高い技術・製品の数々で

世界が注目するSUMITAでありつづける

2023年に100周年を迎え、ナゼ太郎には妹分の「ナゼびよ」が誕生しましたが、それ以外に大きな変化などはありません。

「光学ガラス」の開発製造、光学ガラスの精密加工を行う「光システム」、光や画像を伝送する「光ファイバー」、医療用の「メディカル」。どの事業も世界的に需要が高まっており、昨年の売上高における海外比率は約50%。特許も毎年のように増えており、顧客対応力も高まっています。

素晴らしい成果を上げてくれる社員たちに、よりよい環境・待遇を整えれば、結果として業績は伸びていく。だから「現在の良い状態を維持する」が私の使命だと思っています。



事業拡大に伴い1993年にさいたま市に移転。この他、福島県南会津に製造拠点を展開している。